

福祉用具のリフトを使おう

医療法人社団研医会高岡駅南クリニック院長 塚田邦夫

福祉は難しいと考えられることもありますが、実際は憲法でも保障された「健康にして文化的な生活」を維持するための全てのことでしょう。たとえば、精神や身体に不具合を持って、それを補填し生活に適応させるものの全てです。この福祉をしっかりと行うために使うのが、福祉用具です。

福祉用具の目的と備わるべきものとして以下の3つのことが提唱されています

1. 介護者を守る：介護者の健康を害さない
2. 本人を守る：福祉用具を使うことで不慮の事故から守り褥創の発症を予防する
3. 本人の能力の発揮：幸せと生き甲斐を持ち最大限の自立を目指す

福祉で何ができるのか

実際に聞いた話として、「神経難病の方が、人工呼吸器を付けながらディズニーランドへ行って楽しんできた。」「死期が近い方でも、お盆を田舎の九州で過ごしたいと、飛行機を利用して行ってきた」「好きなアーティストのコンサートに車イスで出かけてきた」などは福祉と言えるのではないのでしょうか。

日常にみられる福祉とかけ離れた介護現場

寝たきりになっても、「ベッドにいただけではなく車イスに移ったり、また疲れたらベッドに戻ったりを繰り返したい」「(ポータブル) トイレで排泄をしたい」「お風呂に入りたい」などは普通の欲求です。

でもこれを行うためには、1日10回以上の移乗動作が必要です。身体を持ち上げて車イスに移る、便座に座らせる、浴室に身体を入れるなど、いずれも介護者の腰への負担は大変なものがあります。介護保険では、これをヘルパーの方に依頼しますが、そのためヘルパーの多くは厳しい腰痛に悩まされ、あるものは腰痛のために介護現場から去っていきます。これは福祉における「介護者を守る」に反します。

それでは、介護者を守るために移乗回数を減らすとどうでしょうか。「排泄はおむつにする」「車イスに移ったらずっとそのままにする」「そもそもベッド上のみで生活させる」などとなります。

これも福祉の「本人を守る」に反します。

ましてや、「本人の能力の発揮」からほど遠い状態で、遊びや趣味のために外出するなどの発想は全くありません。

まずは、移乗を容易にすることを考えてみましょう。その場合、最近の利用者および介護者に優しい移動・移乘法の習得がありますが、これはかなりなテクニックが必要で一般の介護者に覚えてもらう事はかなり無理があります。

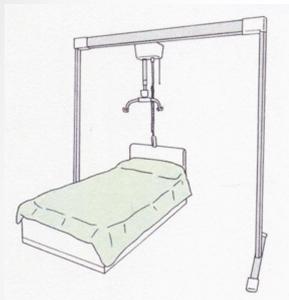
そこで、特に在宅において介護者が簡単に学習できる移乗介護法として、「リフト」の利用があります。

今回はリフトによる移乗のポイントについて解説します。

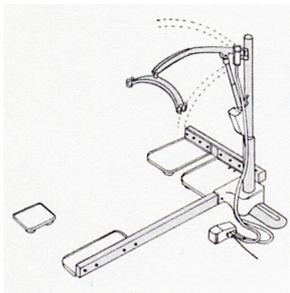
リフトの分類等基礎知識

リフトの種類：以下の写真のように、「据え置き型リフト」「設置式(ベッド固定式)リフト」「床走行リフト」が挙げられます。

リフトの種類



据え置き式リフト
簡単に設置できて
安価



設置式(ベッド固定式)
ベッドの重量を利用し
て安定させる
限定された移乗介護
用

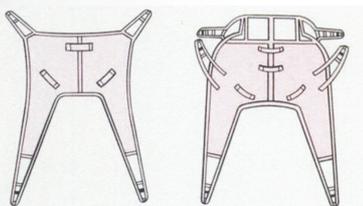


床走行リフト
畳・ジュタンには不向き
注：移乗機であり、移
動機ではない

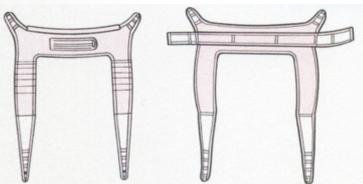
吊り具の種類

吊り具は身体に接触するものであり、リフト本体のレンタルをしてもこの吊り具は利用者が購入する必要があります。最も使用されるのは「脚分離型吊り具」でしょう。

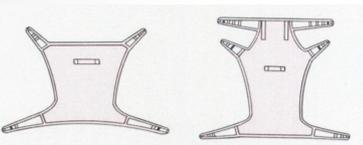
吊り具の種類



脚分離型吊り具
右はハイバック型



トイレ用吊り具
殿部が大きく開いた形状
股関節固定力不足にはベルト付き



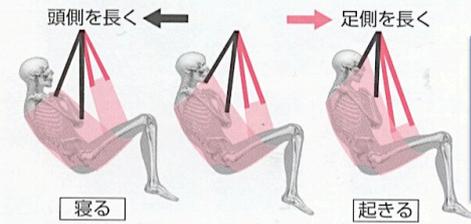
シート型吊り具
臥位でしか着脱できない
吊り上げ感覚が最も安楽

吊り方と姿勢

吊り具には頭側と足側にストラップ（引っかけるヒモの部分）があります。このヒモの部分長さを変えることで姿勢が変わります。

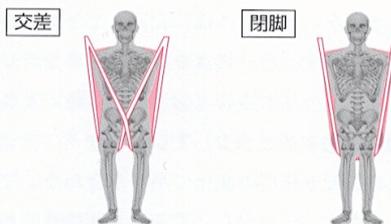
吊り方と姿勢

図2 | 姿勢の調節



- 吊り具の頭側を長くすれば寝る姿勢になる
- 足側を長くすれば起きる

図3 | 交差と閉脚



- 脚部の吊り具は一般的に交差して開脚で使う
- 閉脚にすると殿部が脱落しにくくなる

移乗動作の実際

車イスからの移乗について解説します。

車イスからの移乗



- 安全に前屈位になる
- 背部のセンターを合わせる
- 下端を臀裂まで押し下げる



- 吊り具の脚部を引き出す
- シワを伸ばしながら、身体に沿わせるように引いていく

車イスに座っている状態で、吊り具を挿入します。

まず前傾姿勢を取ってもらい、吊り具を背中に添って挿入していきます。

注意点は、吊り具の中心と背中の中の中心を一致させることと、吊り具の下端を臀裂まで押し下げることです。

車イスからの移乗



- 両方の脚部の内側を均等に内側方向に引く
- 左右のバランスを整える



- 吊り具の脚部を対象者の大腿に差し込む
- 対象者の足部を大腿部に乗せると、両手が使える

吊り具の脚部を左右均等に引き出し、大腿部の後面を回して交差させます。

この時臀部や大腿部に捻れやシワのないようにします。

車イスからの移乗



- 両方の吊り具脚部を大腿の下を通す



- リフトで吊り上げ、荷重が少し掛かる状態で折れ曲がりやシワなど不具合を直す
- 足底を持って行くと、やりやすい

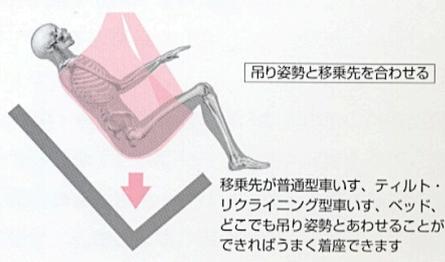
吊り具をフックにかけてリフトで吊り具を上げていきます。臀部にまだ荷重が掛かっている段階で一旦停めます。ここで上肢を引き出すようにして背中の中の突っ張りを取り除きます。また、臀部や大腿部のシワや折れ曲がりを取り除きます。これらの操作で快適になります。

リフトからベッドなどへの移乗

リフトからの移乗先が、ティルトリクライニング車イス、標準型車イス、ベッドなどであった場合等、いずれも考え方は同じです。

リフトからの移乗

図 14 | リフト移乗



- 移乗先が、車イス・ベッドのいずれでも、吊り姿勢と移乗先を合わせるポイント

吊られている時の背中の中の角度と、車イスやベッドの背中の中の角度を合わせることがポイントです。いずれも、背中が車イスやベッドの背中部分を滑るように降ろすことがポイントです。

まとめ

リフトを使った移乗法は、ここに示す以外にも守らなければならない基本が幾つかあります。しかし、同じ器具を同じ方に使うわけですから、正しいやり方を適切に指導されれば決して難しいことではありません。少なくともテレビのリモコンよりは簡単と一般的にいられています。つまり、より在宅での介護に適しています。

ポイントは、適切な指導のもとで、実際に練習して慣れることが大切です。福祉用具であるリフトをもっと日常的に使うことで、本人と介護者を守りつつ、余裕を持って本人の能力を活かし、生活を楽しんでもらえるようにしたいものです。

今回のプレゼンは、日本看護協会出版会 窪田静監修「生活環境整備のための“福祉用具”の使い方」および、財団法人テクノエイド協会「福祉用具シリーズ VOL. 4 リフトと吊り具の使い方」から多くを引用致しました。